

バスケットボールプレーヤーの状況を読み解く身体知
平成29年度

中瀬 雄三
東京成徳大学 助教

<研究の背景>

バスケットボールにおいて、シュートやパス、ドリブルといった技術力の習得や洗練が重要であるが、ゲーム状況を解決するための戦術トレーニングも欠かすことはできない。戦術トレーニングといっても、チームとして決められた動き方、いわゆるフォーメーションプレーを記憶する能力を伸ばすことだけを目的としていない。金子（2005a）は、戦術行為を行う実践的な能力を戦術力と言い表している。つまり、バスケットボールの戦術トレーニングでは、常に変化する複雑な状況において、適切な戦術行為を実践できる能力を育成するための練習が目指される。

これまで、周囲の状況を察知する能力は状況判断能力と定義され、多くの調査がなされてきた。状況判断は、注意、認知、予測、決定という4つの精神的過程を経て行われるものとされている。このような認識のもとで行われる典型的な調査研究は、試合のビデオ映像を被験者に見せ、その状況での適切な動き方を回答させるという方法で実施される。この調査方法では、被験者の戦術的知識を明らかにすることができるが、その場で適切な動き方を即興的に実践できる能力は問われない。

選手の戦術力を自然科学的視点から研究を行おうとすれば、多分な情報を含む状況から測定可能な事象のみを扱わざるを得ない。本来、バスケットボールにおいて適切なプレーを選択実行するためには、対戦相手や味方選手のプレー中の意図や身体能力などを察知しながらプレーをすることは必要不可欠であるが、量的研究ではそれらを分析対象として組上に載せることはできない。さらに、バスケットボールの状況において考慮しなければならない事象は、コート上の選手の空間的位置関係だけでなく、クォーターごとの時間や、24秒、ファール数、監督から指示された戦術内容、味方との関係性、ゲームの流れなど、非常に多岐にわたる。優れた選手は、これらの要素が含まれた状況を瞬時に捉え、適切なプレーを実行する。そのような実践的能力は実践現場において重要な能力として捉えられている。しかし、時間や点差、ゲームの流れなどを読む能力は研究対象から外されてきた。研究対象として措定されないのであれば、その能力を育成するための練習方法や指導方法を考案することもできない。従って、ゲームを総体的に捉えながらプレーする実践的能力を解明する必要がある。

<論文全体の目的>

本論の目的は、バスケットボールのゲーム状況を総体的に捉えることができる選手の能力、すなわち、状況を読み解く身体知を発生運動学的視点から解明することである。

本論の目的を達成することにより、バスケットボールにおける練習方法や指導方法の考案、選手や指導者の育成プログラム作成に寄与する基礎的資料を提示でき得ると考える。

<各章の概要>

本論は4章構成となっている。第1章では・・・

第2章「バスケットボールプレーヤーの状況を読み解く身体知を明らかにするための概念・方法論の検討」では、構造と場面を読み解く能力を解明することに先駆け、概念の整理と、身体知研究の意義について確認された。身体知研究の意義は、自然科学的には測定できない選手の感覚を、量に置き換えず質のまま分析・解明することで、選手の技術力や戦術力を高めるために不可欠な知見や理論を導き出し、コーチング現場へ寄与することである。

身体知研究では、自分の意識体験を反省し、誰にでも共通する、一般的で本質的な内容（反省的エヴィデンス）をもとに論証することが目指される。また、本論では、現象学的方法である本質観取を基盤にしながら、考察過程において必要となる実例を集めたり、考察過程の明確に示すことを目的として、半構造化インタビューやSCATといった質的研究方法を採用していることが明言された。

第3章「バスケットボールプレーヤーの状況の構造を読み解く身体知」では、状況の構造を読み解く身体知について考察された。オリンピック男子バスケットボールのゲームにおけるプレー事例をもとに、選手の戦術行為の意味を探索するために有用である印象分析を実施し、選手の状況の構造を読み解く身体知の3つの要素が示された。

一つ目は、「対応方法を身体化できていること」である。これは、オフenseによる様々な対応方法を、理論的理解に留まらず、身体知の次元で獲得できていることを示している。二つ目は、「バスケットボールの原理が体得されていること」である。バスケットボールの原理とは、すなわち「オフenseがゴール付近に位置すれば、ディフェンスが密集する」ことであり、この原理を体得できていることが、状況の構造を読み解く上で重要な要素であることが示された。三つ目は、「相手や味方の動感を読み解けること」である。

プレーが成立する本質的要因として、パサーとレシーバーが互いの動感を把握しあっていることが示された。プレーを成立させる上では非常に多くの能力が必要になることはいうまでもないが、これら3つの要素は本質的な位置を占めているといえる。

第4章「バスケットボールプレーヤーの状況の場面を読み解く身体知」は、2節構成になっている。第1節「場面的要素としてのゲームの流れの構造に関する考察」では、場面の重要な要素の一つである、ゲームの流れの構造について考察された。ここでは、流れの2つの性質として、継続性（一度チームに発生すると形勢が逆転しづらい性質）と、強制性（特別な措置をとらない限り流れが発生しているチームが優位にゲームを展開される）が確認された。それらの性質を有する流れは、「選手の感情」が直接的な発生要因となっており、「試合に関する事象」と「選手の価値観」の二つの要素とも互いに影響し合う構造になっていることが明らかとなった。

第2節では・・・

<結論>

バスケットボールのゲームにおいて、ミスは育成年代のレベルだけでなく、プロレベルでも起こり得る。ミスが現れる場面では、その内容（質）にもよるが、選手の戦術力が露わになることは少なくない。指導者は選手が引き起こしてしまったミスの場面から、選手の戦術力を査定し、必要だと思われる指導や練習を提示しなければならない。

一言にミスといっても、その内容は非常に多種多様であり、一義的で明確な線引きはできない。しかし、コーチングをする際、ミスの内容を把握できないことには、改善のための練習方法や指導方法が検討されることはない。ボール操作に関する技術力の欠陥によるミスであったにも拘らず、選手の過失によるものだと見出せば、本来必要な技術トレーニングではなく、集中力を高めるためのメンタルトレーニングが処方されてしまうように、見当違いな方向で指導内容が決定されてしまうことが危惧される。

本論において、バスケットボールの状況を構造と場面という2つに分類し、それらを読み解く能力について論述した。このことは、ミス場面などに如実に現れる選手の戦術力査定の際の指導観点となり得ると考える。何故なら、指導者が選手のミスの再発を防ぐために、選手が状況の意味をどのように見出していたのかを捉えなければならず、さらに、そのミスの内容に見合ったトレーニングプログラムを考案することが求められるからである。そのためには、状況を読み解く際に必要な能力を理解しておくことが不可欠であろう。

無論、本論で挙げられた構造と場面を読み解く身体知は、バスケットボール選手の戦術力の全容を明らかにしたものではない。今後、さらなる調査と検討を加え、発生運動学的視点からバスケットボールの戦術力の解明に取り組むと同時に、それらの資料をもとにした戦術力育成のためのトレーニング法の創案や臨床的研究を実施していく必要があるであろう。